

福田麻子さん

在学生インタビュー

シンフォニーオーケストラ定期演奏会でのコンサートミストレスや短期留学などを経験し、第 87 回日本音楽コンクールでは第 3 位を受賞した福田麻子さん（ヴァイオリン・大学 4 年）に、学のオーケストラのことなどを語っていただきました。



Profile

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校卒業。第 16 回クロスター・シェーンター国際ヴァイオリンコンクール第 3 エイジグループ第 2 位・バッハ賞。第 87 回日本音楽コンクール バイオリン部門第 3 位。藤原浜雄、小栗まち絵に師事。

ー 福田さんは現在 4 年生。学部生として最後のオーケストラでしたね。コンサートミストレスとしていかがでしたか？

プログラムがシュトラウスの交響詩『ツァラトゥストラはかく語りき』と、モーツァルトの『交響曲第 35 番「ハフナー」』、ジョリヴェの『打楽器協奏曲』と聞いたときは、「ツァラトゥストラ」にコンミスのソロがあるということを知っていたので、ドキドキの反面とても楽しみに思いました。

有難いことにオーケストラのコンミスは何回かやらせていただいています。シンフォニーオーケストラ定期演奏会というあそこまでの大編成ははじめて。そして創立 111 周年記念という記念の公演。指揮は広上淳一先生。もちろん広上先生の演奏会を聴きに行ったことはありましたが、自分が乗るオーケ

ストラを先生に振っていただくということははじめてだったので、とても楽しみでした。

広上先生からは、「プロのオーケストラのコンサートマスターは、合図などは冷静にするけど、演奏はほぼ後ろに任せているんだよ」とアドバイスをいただきました。もちろん学生のオーケストラとプロのオーケストラは違いますし、私も熱が入ってウワーっと弾きたくなることもありましたが、もし今後プロでコンサートミストレスをやれる機会があったら、冷静に、後ろに任せられるように弾けたらと思います。

広上先生は細かいことはあまりおっしゃりません。言葉で事細かく説明するよりも振ってみせてくださいます。特にシュトラウスは先生のレパートリーの中でも十八番なのだそうですが、世界観をしっかり持たれていてそれを全身で表現されます。先生のイメージにぴったりな曲だと思いました。モーツァルトはシンプルな分、粗が目立つのですごく難しかったのですが、本番は練習の時とは違う指揮者のすごいエネルギーを感じて、私たちもその波に乗って、すばらしい演奏になったと思います。皆も楽しかったと言っていました。

—今年度は例年よりもオーケストラの公演が多かったですよね。

今年は「音楽大学オーケストラ・フェスティバル」の出演や、ふくいハーモニーホール（福井県）での特別公演、そして東京芸術劇場での定期演奏会と、短い期間に3つの本番がありました。「オーケストラ・フェスティバル」が終わってからそのまま福井に向かって、次の日が本番というハードスケジュール。ですがプロの方々は一年をとおしてもっとハードなスケジュールで動いているので、それを学生のうちにほんの少しでも体験できたというのはよい経験になりました。

オケのメンバーとは本番を何度か踏むうちに、今まではあまり話したことのなかった人とも自然と仲よくなれ、皆の気持ちがひとつになったような感じがしました。

—4年間を振り返って、東京音大のオーケストラはどうでしたか。

東京音大のオーケストラは弦楽器の場合、1年次はいわゆる「B オケ」で弦楽器だけの「弦楽オーケストラ」を学びます。そして2年次からは管打楽器と一緒に「A オケ」で「オーケストラ」を、さらに学年が進むと、学外のホールで演奏会を行う「S オケ」へと移っていきます。

B オケではコンミスの隣で山口裕之先生が弾いてくださったのですが、NHK 交響楽団や東京フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターの経歴をもつ先生の動きや、どこを聴いていてどこを意識するかなど、オーケストラで演奏するための心構えやテクニックなど細かく教えていただけたのはとてもいい勉強になりました。

それからS オケでは、授業の中で作曲「芸術音楽コース」の学生が書いた作品を演奏するという機会があって、それがおもしろかったです。普段“クラシック”をやっている私たちと同じ時代を生きる作曲家の、ましてや同世代の方たちが書いた曲に取り組む機会はなかなかありません。作品についての説明を本人がしてくれるのですが、それを聞くのもとても勉強になりました。大きなコンサートホールで大曲を演奏できることのほかに、そのようなことを経験できたのもS オケのよいところだと思います。

—今年は第87回日本音楽コンクールで第3位を受賞。おめでとうございます。

日本音楽コンクールは大学3年の時にも挑戦しましたが、三次予選で落ちてしまって。もともと東京

オペラシティでプロのオーケストラの方々と弾きたいという目標があったので、今回本選まで進めたことはとてもいい経験になりました。

本選ではバルトークの『ヴァイオリン協奏曲第2番』を選びました。一般的にも演奏される機会が少ない曲なので、先生も親身になってどういう風に弾けばいいのか一所懸命考えて、直前までアドバイスをくださりました。とにかくスコアをよく読み込んで、オーケストラと弾くということをしっかり勉強しました。

—短期留学も経験されましたね。

日本音楽コンクールが終わってからの10月末から11月中旬まで、大学の短期留学プログラムを利用してフィンランドのシベリウス・アカデミーに短期留学をしました。普段は曲を仕上げることに意識が行きがちですが、そこでは基本的な演奏の仕方や自分の演奏スタイルのことなど、新鮮なアドバイスをいただきました。

寮に空きがなかったので、シベリウス・アカデミーに通っている東京音大の卒業生の方とシェアハウスで過ごしました。レッスンは英語でした。フィンランドの方々は英語が堪能なので、英語での暮らしに困らないのは助かりました。

—今後の予定は？

来年春から大学院修士課程に進学する予定ですが、将来は海外での演奏活動のために留学をしたいと思っています。そのための準備として外国にも足を運んで行きたい学校や先生を探そうと思っています。

—最後に、受験生へのメッセージをお願いします。

東京音大の一番いいところは、さまざまな学びの機会に恵まれていることです。短期留学やたくさんの演奏のチャンスがあるので、自分から積極的にチャレンジすればとても充実したキャンパスライフが送れると思います。これから入学される皆さんも夢をもって挑戦してください。